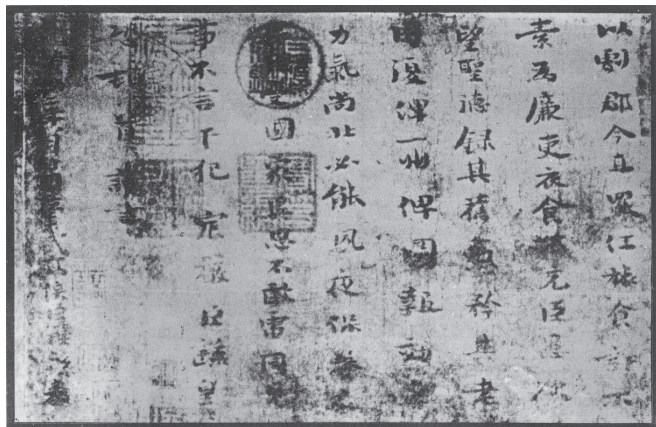
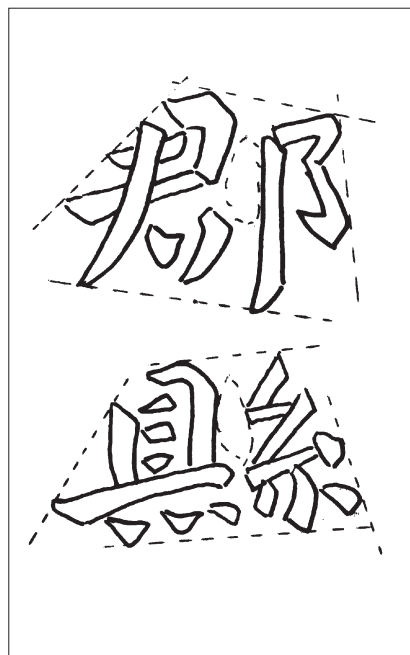


◆半紙一行たて書きに臨書して下さい。出品料440円



「薦季直表」真跡本

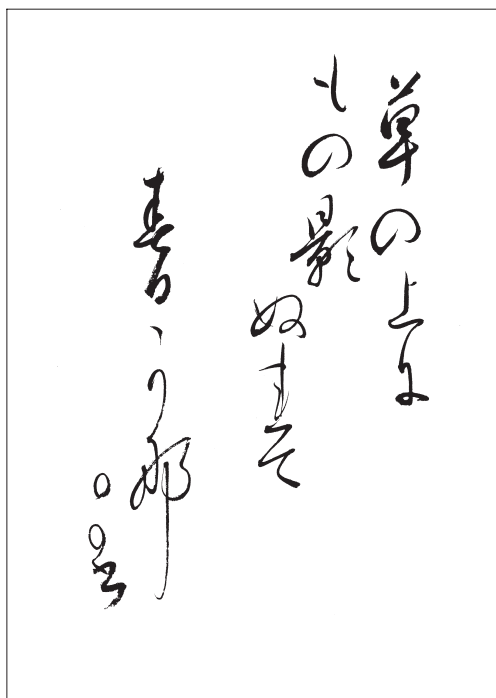


せん き ちやく ひょう しょう よう
薦季直表・鍾繇

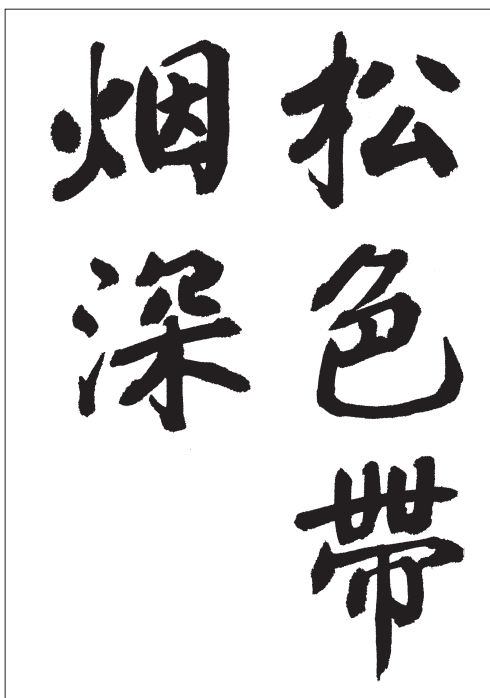
第二回

- 1、字句「郡縣」
- 2、形式「半紙タテ使用。中央に「郡縣」と臨書し、左余白に落款「○○臨」と書き入れる。
- 3、概観「上図は、一月号で取り上げた「薦季直表」の真跡本で、第六期（上海書畫社）「書法」に紹介されたものです。
- 4、各字のポイント
郡 「口」の部分をもつ二つの点に省略されて、行意を感じさせる。形は裾広がりにし、安定させる。
縣 偏と旁の間を充分にあけ、下部はほぼ等間隔にしてそろえている。「県」部の三点は、上下左右の画に触れていない。下の三点は、右にいくほど小さくしている。

半紙課題（予告） (五月二十二日締切)

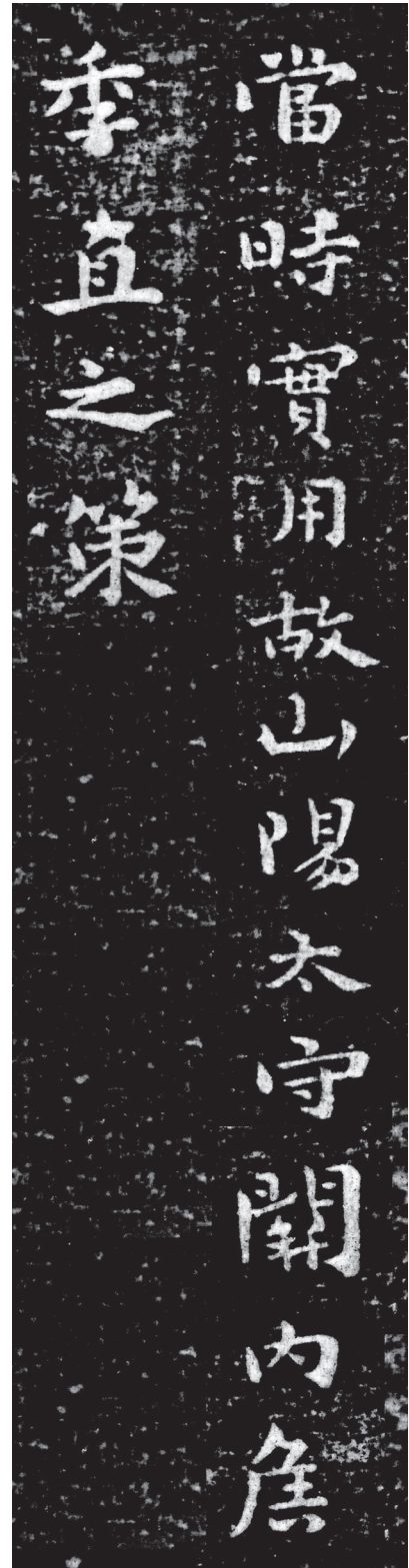


訳：松は雨にけむって緑の色が深い。
平岡華雪先生書 草の上にも影ぬれて春日かな（虚子）



平岡華雪先生書 松色烟を帯びて深し（張謂）

薦季直表 鍾繇



當時實用故山陽太守關内侯季直之策

※昇試随意部参考（半紙・条幅）としてもご利用下さい。抜粋可。

一字書（四月二十二日締切）

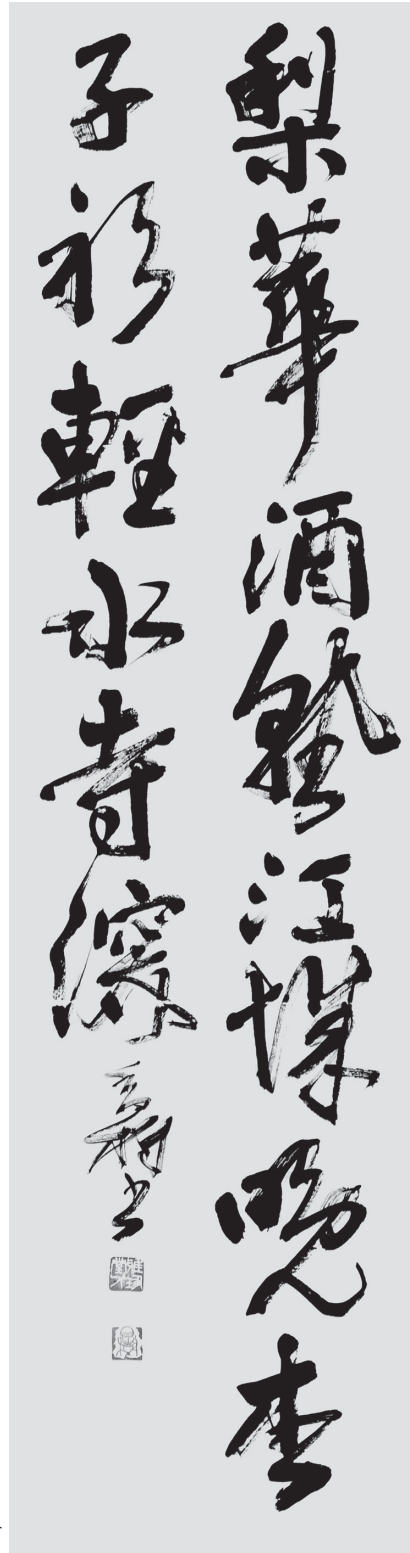
課題

悟

- (1) 書体自由
- (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
- (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
- (4) 出品料 四四〇円
- (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に一字と記入 段級は無記入

A
高橋香樹会長書

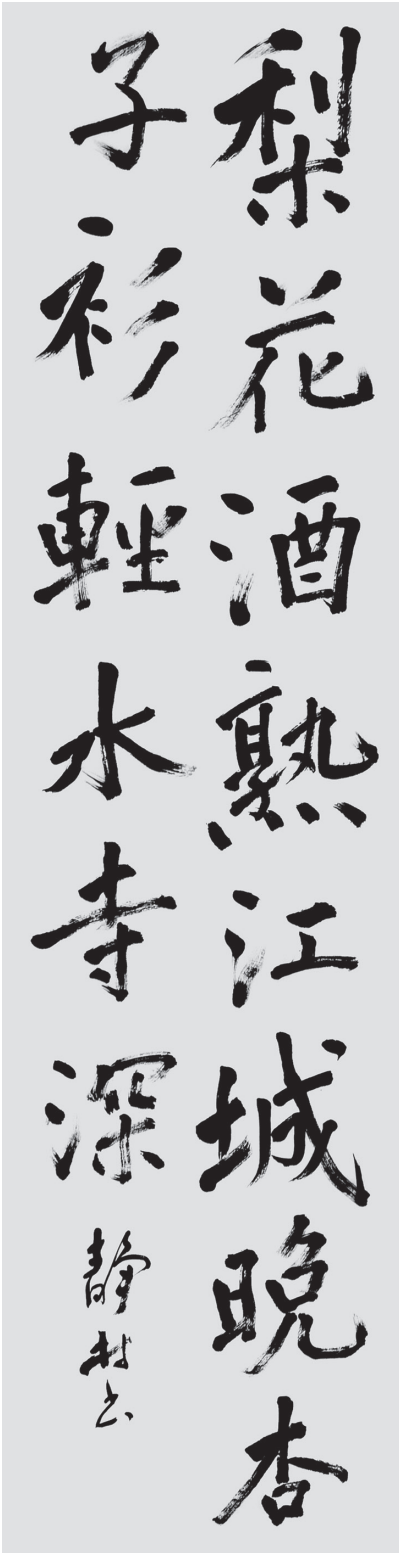
梨花酒熟江城 晚杏子衫輕水寺深 (厲鶚)
梨花酒熟して江城晚れ、杏子衫輕くして水寺深し。



B
鈴木静村先生書

行草の単体作(連綿一ヶ所)。行草の単体では、流れの変化を創出しづらくなる為、上の字との関係性を高めるようにしたい。「花」は後出字で、もとは「華」である。今回は「華」を使用しました。「深」も後出字で、もとの字は「澗」、はじめて使ってみました。墨継ぎは、「晚」と「輕」。

深



梨 一画目の用筆がこの字主柱。「利」を大きく、「木」は小さく。花 冠二点は弾ませて三画目と離す。酒 「西」の六画、七画と小画が続き、さらに末画で締める。熟 連火は突き用筆で活きいきと。城 主画の戈法如何で決する字。晚 旁の一画を省いている。この字体にも馴れてほしい。子 逆入筆で強く、末画の交差位置注意。衫 偏の右肩を揃え、旁の右肩も同じ。輕 旁の書き方は他にもあり、字典参考。寺 二画目が三画目を突き出している例は多い。訳：江のほとりの城下町に梨の花が咲き、酒宴の好季節である。水辺の寺に杏の実がなって、夏の着物が軽やかである。

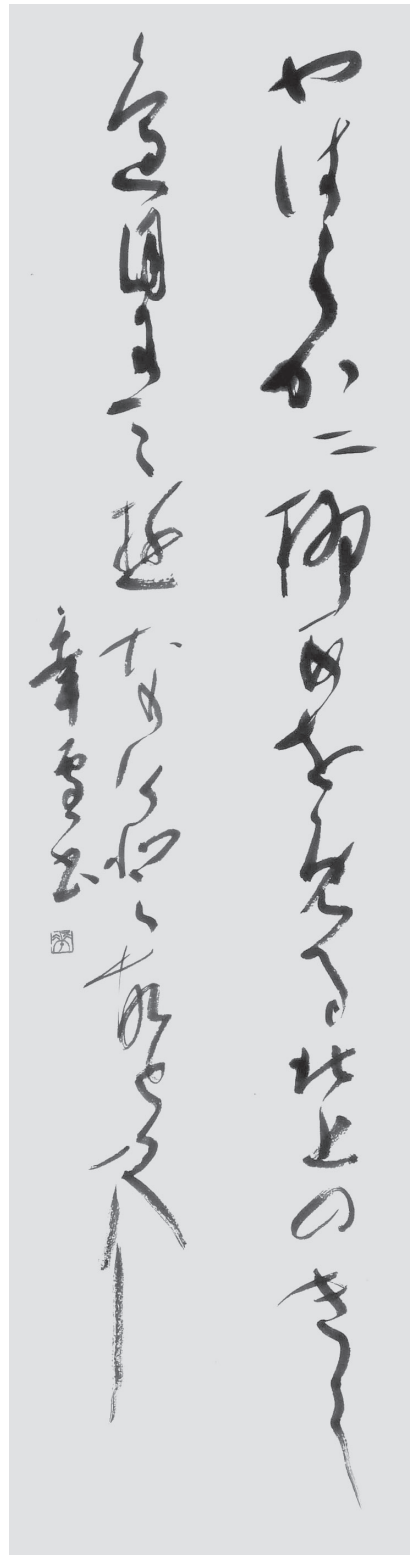
予告 (五月二十二日締切) 月色沙上瀟 山雲天際浮 春江萬里闊 獨見一漁舟 (辺貢)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
- ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

A

平岡華雪先生書

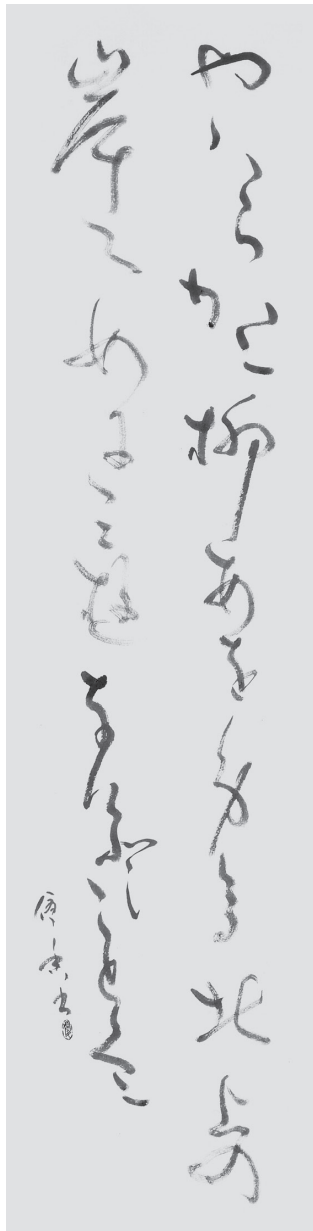
やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに (石川啄木)
 やはらか二柳あをめる北上のきし邊目尔三遊な介登故と久耳



B

本澤優香先生書

やはらかに二柳あをめる北上の岸^へめ^に三遊^な介^と登^くこと久^く二



学び方

- 歌意：やはらかに柳の芽が青く色づいた北上川の岸辺が目に見えるようだ。故郷を思い懐かしさにかにも涙を誘うかのよう。
- ・行のところで漢字が硬くならないよう注意し、仮名を書く気分ですべての流れの中に溶け込むよう自然に書くよう心掛けました。
 - ・一行目と二行目の潤筆部分と渴筆部分の対比と、隣りとの響きを考えながら運筆しました。
 - ・墨継ぎは「奈」。その後は、筆先を使い弱くならないよう留意し、わずかに左から右へと湾曲させ、いつも頭を悩ます落款を本文と調和させました。

この歌は、盛岡での学生生活を回想した歌や、望郷の思いを詠った歌が多く収められている『一握の砂』に載せられている。家族と共に故郷の岩手県を追われた啄木が、故郷洪民村を偲んだ歌である。決して楽ではなく、心を満たされない生活を送る啄木の心に、ふるりの春を追憶の中で、北上川の柳よせて詠ったせつない思いを込めた歌である。

予告

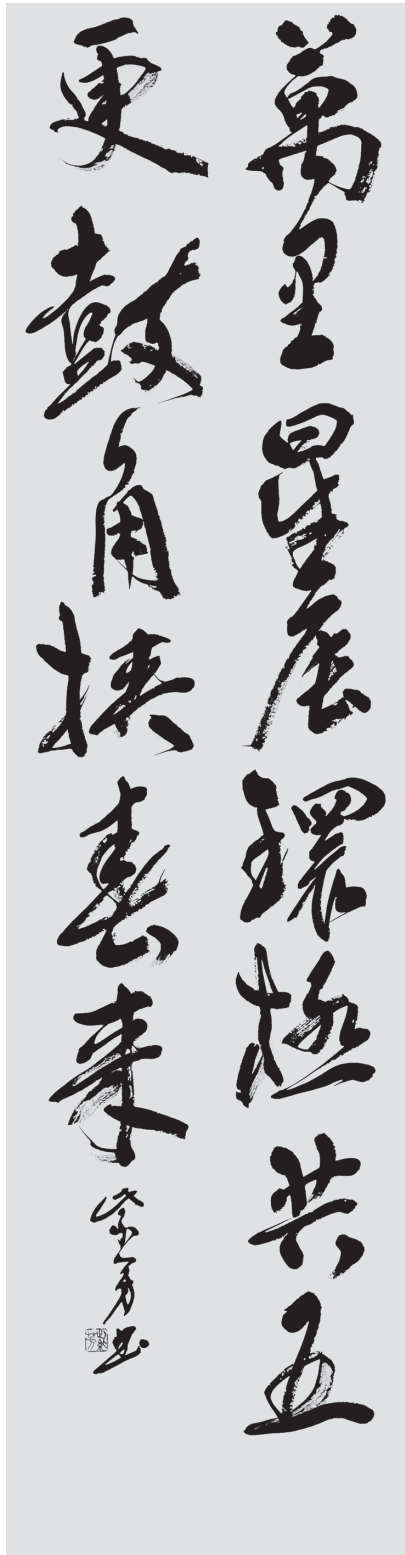
(五月二十二日締切)

花ちりし庭の木の葉もしげりあひて天てる月のかげぞまれなる (新古今和歌集 曾禰好忠)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条かを○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

高橋紫芳先生書

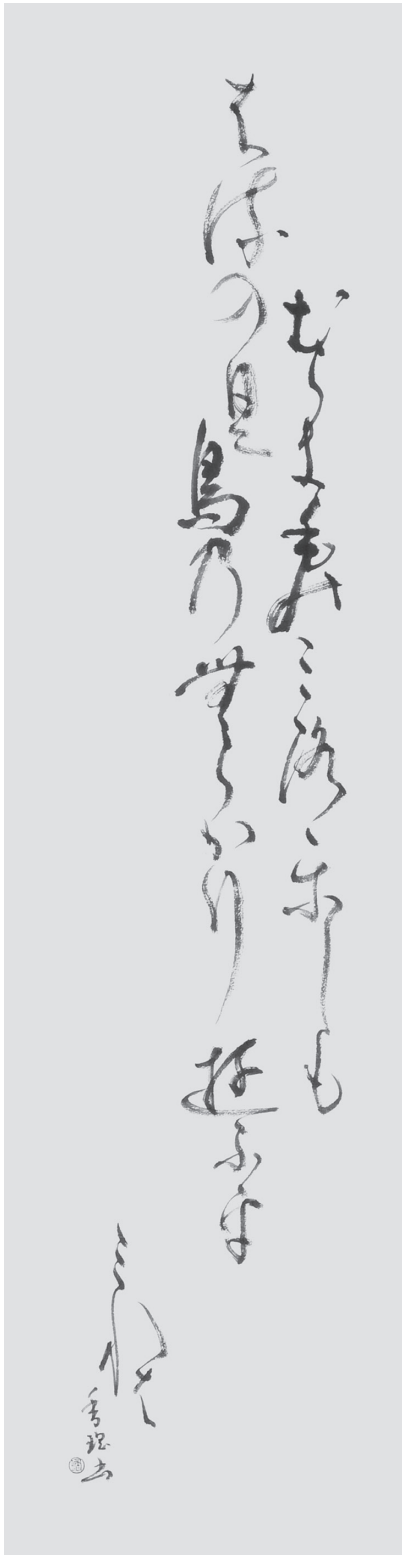
萬里星辰環極共 五更鼓角挾春來 (劉詵)
 萬里星辰環極共 五更鼓角挾春來 (劉詵)
 萬里星辰環極共 五更鼓角挾春來 (劉詵)



訳：大空の星は彼方に遠く天をめぐって共にし、夜明けに打つ太鼓や吹く角の笛は春を送ってくるのである。

内藤香瑶先生書

むらぎもの心楽しも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば (良寛)
 むら支毛能こ、路楽しも者流の日に鳥乃無らかり遊ぶ乎三れ者

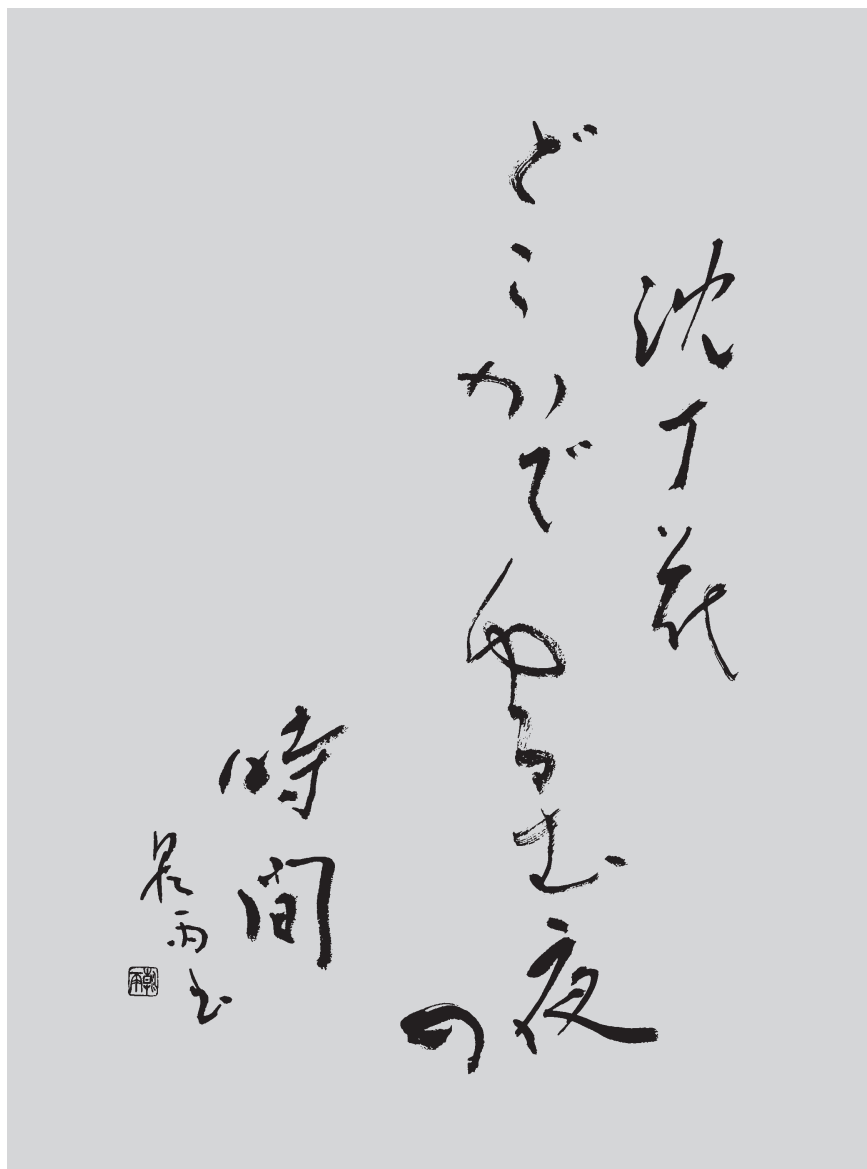


- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条随を○で囲み(1)と記入する。)
 - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条随を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

槍田朝雨先生書

沈丁花どこかでゆるむ夜の時間

野村登四郎



俳句の解説 沈丁花の濃厚な甘い香りが夕闇の中に漂い、刻々と過ぎゆく時間も歩みを緩めているようだ。
構成は、左上の空間を沈丁花の香りが漂うようなイメージで大きく取り、二行目のタテ軸を左右に揺らすことで、緩やかな時の流れを表現。「夜」で墨継ぎ。「時間」の右上がりとは右下がりの文字の組み合わせに留意。

野村登四郎（一九一〇〜二〇〇一）
俳人。水原秋桜子に師事。『沖』創刊。蛇笏賞、詩歌文学館賞など多数受賞。勲四等瑞宝章受章。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙（3×4 cm位）に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。出品料550円。

①バーコード券右空欄に漢かと記入 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

花落ちて溪水香し。(徐賁)
訳：谷川の水には落花が流れて香しい。



〈入筆のバネを利かせて〉
「溪」の傍の第一画、「香」第一画(鳥啄)、この用筆は入筆のバネを利かせて、左横に払い、次画へと脈絡させます。



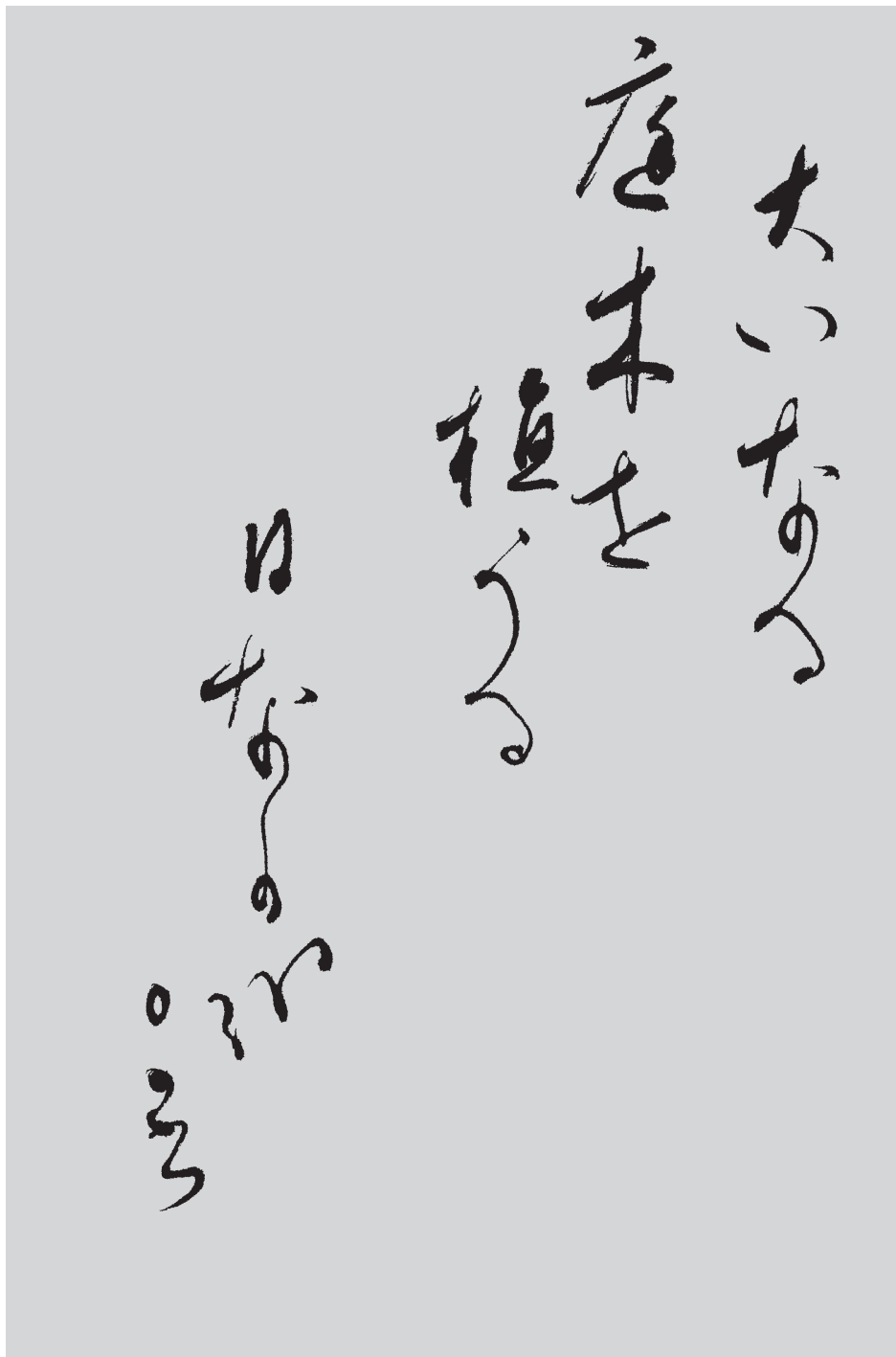
◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

①漢字部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

大いなる庭木を植うる日永かな (壺天)

大いなる庭木を植うる日なかかな可哉



〈連腕大きくリズム的に〉

右群、左群各行頭四字が漢字、細線、濁線を導入し
軽快味を表出のこと。連綿は意連三ヶ所、初歩段階者
は特に習熟のこと。リズムを大切に。



「哉」の草体

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

①かな部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

勝間凜華先生書

鳳林戈未息（杜甫）
ほうりん ぼこ いま ちや
鳳林 戈 未だ息まず

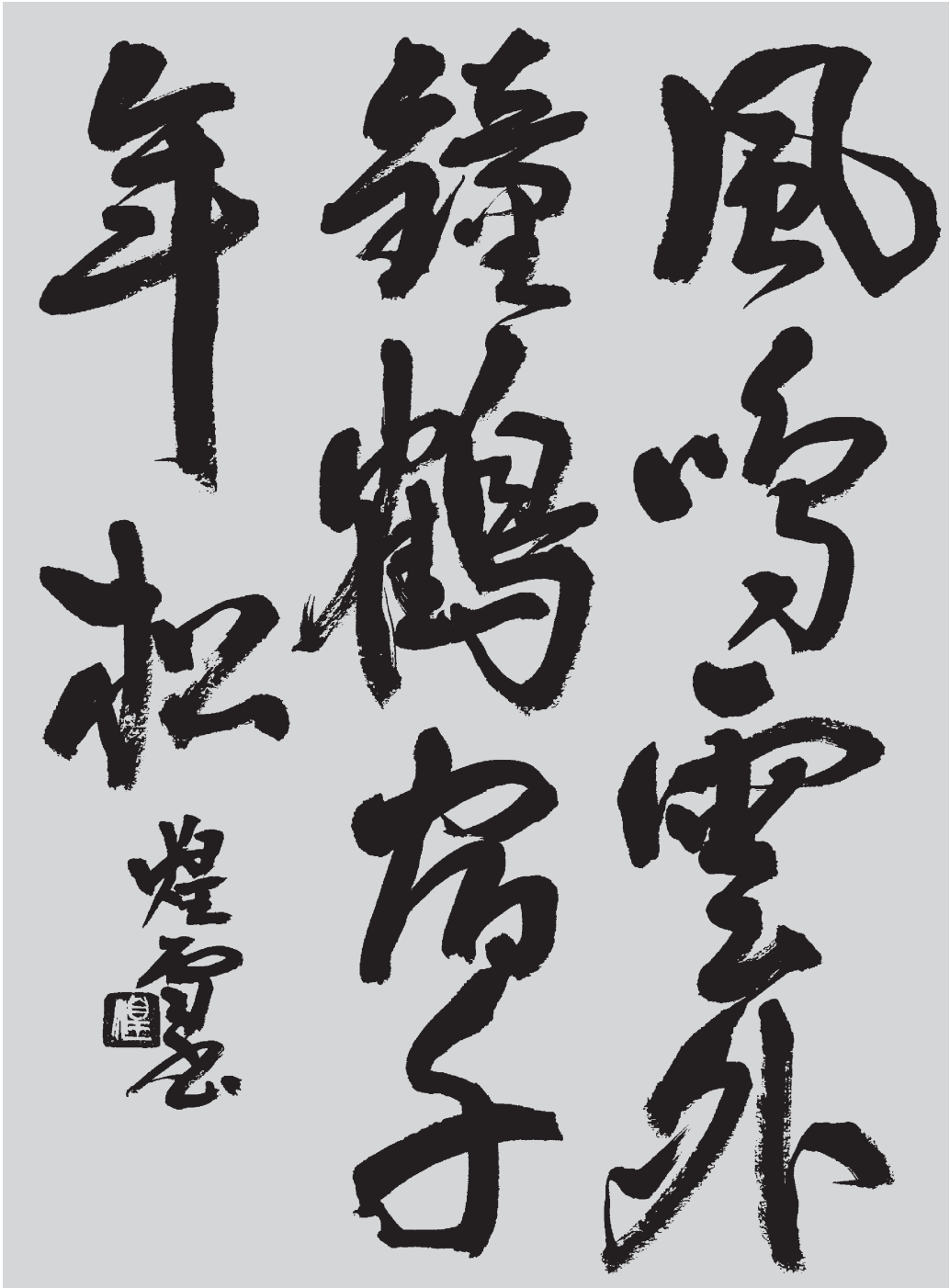


訳：鳳林のあたり、戦闘はまだやまない。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円。

星野煌雪先生書

風鳴雲外鐘 鶴宿千年松（楊衡）
風は鳴る雲外の鐘、鶴は宿る千年の松。

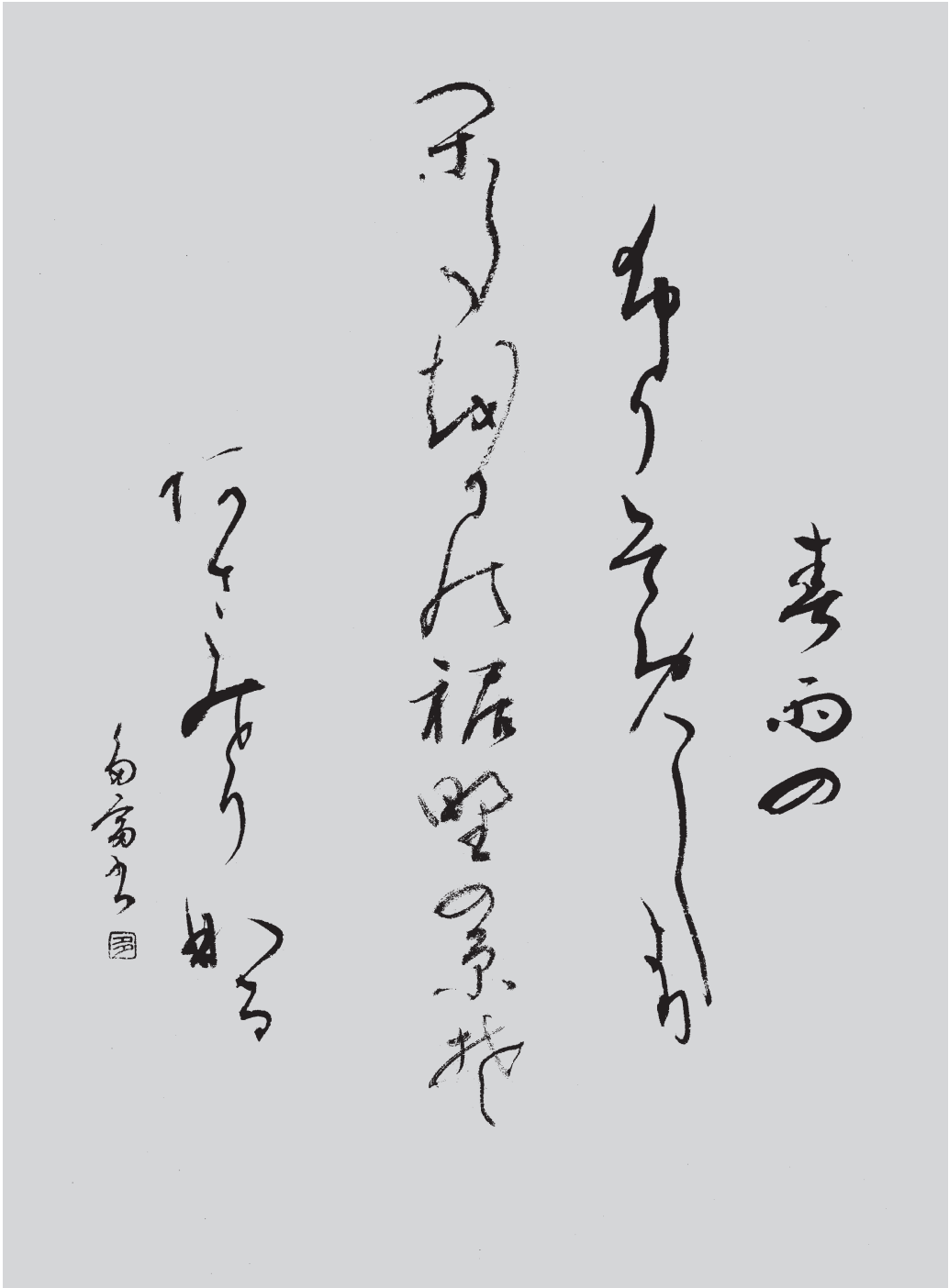


訳：風は雲の外に鳴る鐘の声を送り、鶴は年久しくへたる老松に宿している。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

森
多
富
先
生
書

春雨の降りそめしより片岡の裾野の原ぞ浅緑なる（藤原基俊）
春雨の布りそ免しよ利閑多越可能裾野の原楚阿さみとり那る



1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

稲畑穂穂先生書

石原春香先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)

芭蕉は、俳諧という韻文の世界と、
俳文・紀行文などの散文の両方の
で、優れた作品を数多く残した。

千住といふ所にて、舟を上がれば、
前途三千里の思ひ、胸に塞がりて、
幻の巷に離別の泪を注ぐ。
行く春や鳥啼き魚の目は泪

課題1 (初段階以上)

千住といふ所にて、舟を上がれば、
前途三千里の思ひ、胸に塞がりて、
幻の巷に、離別の泪を注ぐ。
行く春や鳥啼き魚の目は泪
『おくのほそ道』松尾芭蕉

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に、次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2 (初段階以下)

芭蕉は俳諧という韻文の世界と、
俳文・紀行文などの散文の世界の両
方で、優れた作品を数多く残した。
『響映する日本文学史』島内裕子